

43期 ～公開講座～

分け入っても 分け入っても青い山

—種田山頭火の「人と俳句」—

講師 夏石 番矢 氏
明治大学文学部教授

日時 10月10日（土）13時～15時
会場 鶴瀬西交流センターホール
受講生 26名

新聞に掲載された夏石番矢氏著岩波文庫「山頭火句集」（2018年）を片手に講義前より話が始まり聞き手の皆さんは引き込まれました。

講義前の雑談をよくするとおっしゃりながら笑顔の絶えない先生です。

開始時間になり、瀬戸理事長より只者ではないと感じられた夏石先生作の俳句が披露され、挨拶がありました。

種田山頭火については様々な方による句集、伝記が出版されているが、先生はそれらの内容、山頭火の日記の俳句にも着目をされた。今回の講義のために句を選ばれ、その時々々の山頭火の生き方に触れつつ生涯をたどりました。

大地主の長男に生まれながら、母や弟の自死などで繊細で、真面目な山頭火は学業を中断、生きづらさを抱え生涯を送った。奇しくも明日10月11日が命日。



講師 夏石 番矢 氏

1. 最初期の俳句、精神性とモダニズム

1911年（明治44年）、28、9歳の頃の山頭火の書による2首。
和綴じの回覧雑誌に「夏の蝶」を題に、山頭火ではなく田螺公の名でよんでいます。

2. 不眠症=自殺、酒乱の原因 一生の問題

1914年（大正3年）から1940年（昭和15年）まで、無季あり、繰り返し、短律・長律のリズム感がある12首を取り上げられました。

3. 句作の不振

1916年（大正5年）から1920年（大正9年）まで、迷いの時期であり句作も少ない。

しかし、蝶に託し自己を表す3句の紹介。

4. 飲酒

1914年（大正3年）から1934年（昭和14年）まで8句。

1924年（大正13年）自殺未遂、泥酔して市電を止める事件を起こしたとされるが、新聞報道はなく、不確か。

1925年（大正14年）2月に出家得度、3月に味取観音堂堂主となる。

5. 放浪生活へ

1926年（大正15年）4月行骨流転の旅に出る。

「分け入っても分け入っても青い山」

1926年（大正15年）

句集「鉢の子」初出。自己演出かも。

6. 庵暮らしと旅と句作の十年

1930年（昭和5年）から1940年（昭和15年）まで

昭和5年以前の日記類を焼却、転居と旅を続け、淀みと繰り返しを嫌う。

10首。他に最晩年10月の句で「どうしようもない自分が歩いていく」



○水への共感 先生紹介の11首から2首。

「水音、なまめかしい女がをります」生命感、エロスが感じられる。

「水じゅうわうに 柳芽ぶく」 8・7

○ふるさとへの愛着 8首。漢字よりひらがなで「ふるさと」をうたう。

「ふるさとの言葉のなかに すわる」無季 5・7・3

「ふるさとの 土の底から 鉦たたき」(季) 鉦たたき 5・7・5

7. 突出した俳句 私の愛唱句

「闇が空腹」3・4 闇に飲み込まれそうな、どうしようもない孤独感。

「あかるくて／あたゝかくて王様／うごけなくなった」5・10・8

童話・童謡をうたう子どものような幸福感がある。

先生が称して、光と闇、不幸と幸福、短律と長律、山頭火の人生の振幅を見事に表現した2句を取り上げられました。

講義の中では多くの自由律の句が紹介されました。岩波文庫「山頭火句集」御覧ください。

時間がなく、質疑をすることができませんでした。

